

ケインズ利子理論の位置づけ

——三上隆三『ケインズ經濟學の構造』(昭和三十一年)を讀んで——

吉 野 昌 甫

三上隆三氏の『ケインズ經濟學の構造』は、序説、貨幣的經濟理論の生成と背景、第一章、價值理論、第二章、雇用の概念、第三章より第五章、利子理論、第六章、價格理論、第七章、貨幣數量説、第八章、販路理論、第九章、政策理論、第十章、ケインズ經濟學に關する學說史的覺え書、から成り立つてゐる。ケインズ『一般理論』を頂點とする「貨幣的經濟理論の性格」は三上氏の問題意識を以て見事に整理され、その方法論により新しい貨幣的經濟理論への方角づけが完成されてゐる。このやうな勞作は、三上氏も述べてゐるやうに兎角「ケインズ經濟學の單なる祖述に終始するか、あるいは斷片的部分的な不完全な批判に満足するか、更にはイデオロギー的對決に急に於いて、内容と説得力をともなわない、單なる罵倒に終つてしまふ」勝ちであるが、その危険は著者の創造的な見解の體系的展開によつて廻避されてゐる。その點著者の研究は、ケインズ經濟學に深

い理解を示し、而もマルクス經濟學に精通する數少い研究者の研究の成果として、われわれに數多くの示唆を與へてくれる。

こゝでは三上氏の著書の全面に觸れることは紙幅の都合もあり、又既に全般的な著者の見解については、例へば則武保夫氏(國民經濟雜誌、昭和三二年一月號)の書評が、販路理論、價格理論、貨幣數量説の部分については、伊東政吉氏(經濟研究、一九五七年四月號)の書評等があるので、避けることにして、著者がケインズ經濟學の特色を示す部分として研究を集中したと思はれる利子理論を中心に私の意見をのべ、三上氏の御教示を得たいと思つてゐる。なほ以下論述中の引用頁はすべて當該著書のものである。

一

ケインズの『一般理論』が一般理論としての資格を要求し得る理由が非自發的失業概念の理論的説明にあつたとすると、その概念の説明に向けらるべきケインズの派生的理論部分はそれとの體系的關係に於て論ぜられねばならない。その場合、非自發的失業はケインズ經濟學の基礎範疇であり、それからの派生的理論部分は上部構造たる諸理論を形成する。

三上氏のケインズ經濟學の構造のとらへ方はこのやうな方式で進められ、從つてケインズの上部構造理論、つまりこゝではケインズの利子理論、の批判は二つの方法で行はれる。(一)基礎範疇と上部構造理論の間の論理的・一貫性を追求するために、一般的觀點から批判が進められ、それによつて上部構造理論の特

質が同時につかみ出される。(二)次に基礎範疇に對して向けられた批判の觀點から上部構造理論の特質が説明され批判される。もし基礎範疇と上部構造理論の論理的・一貫性が密であればある程、その批判は徹底的、「根こそぎ的批判」となる。第一の批判は外部的・消極的批判であるのに對して、第二のそれは内在的・能動的批判であるといふことになる。

三上氏のケインズ利子理論批判はこの線に沿ひながら、三つの章、第三章、利子理論(その一)から第五章、利子理論(その三)までに於て展開される。以下その展開を簡単に跡づけてみたい。

第三章の展開の内容を三上氏は次の如く述べてゐる。

「ケインズの『一般理論』をしてかくまで論理的と同時に他に類書を見ないまでにきわめて政策的でありうるのは何故であらうか。これこそ特異な彼の利子理論によるものであるといふ。彼の利子理論は彼の理論的政策論の旋回の起點であり、また論理的にして政策的というケインズ理論の特異性の支柱でもある。……」

しからはケインズ理論のかかる性格は如何にして可能であるか。以下、利子理論のケインズ經濟學における地位・性格・特にケインズ經濟學の論理的政策的という特色ある性格との關連を説明しよう。(一〇〇頁)

第一に三上氏はケインズ利子理論の理論的特色を要約して「利子率の決定要因は貨幣量と流動性選好との二者であること。すなわち生産的要因は利子率の決定要因として作用しない

こと。これがケインズ利子理論の精髓であり、彼の理論を純貨幣的利子論または流動性選好と呼ぶ所以である」(一〇五頁)とする。このやうな規定は利子の一般論の規定と呼ぶ。

之に對して第二の規定は利子の貨幣論の規定と呼ばれる。貨幣のもつ諸特質、つまり生産・代用の非弾力性、流動性の絶大、持越費用の絶無、被需要の無限性、等の「ゆえにこそ、貨幣利子率は緩慢な低落によつて他のすべての財貨利子率すなわち資本の限界効率の歩みを指導することによつて、他の財貨を生産するための投資を制限し、同時に雇用水準に限度をもうけるのである。利子の生産支配性という特色は實にかかる貨幣の基本的性質のもたらすものである。」(一一五頁)

利子の生産支配性は三上氏によると、「(A) 貨幣利子率↓投資量↓資本の限界効率、と、(B) 投資↓所得↓貯蓄、の二つの支配關係的因果關係の系譜より、利子の經濟體制に對する絕對的支配權力」(一一頁)の確立を示すものとして、先の特色と共に、流通の一方的な生産支配を可能にして、ケインズ政策論の基礎としての地位を利子に附與することになる。

このやうなケインズ利子理論の特色づけをすませて、次にそれへの批判が開始される。それは二段階、消極的批判と能動的批判、に區分して實施される。第四章では消極的なケインズ利子理論批判がなされる。

第四章では貸付資金需給説の立場から流動性選好説を古典學派の資本需給説と對比しながら、ケインズ利子理論の特異性、つまり純貨幣的現象としての利子の理論の特異性、をケインズ

の資本、利潤及び利子觀と利子率決定の背景に著者は浮上らせようとする。

著者の獨創的な見解は通常の貸付資金需給説から一歩踏み出してケインズの利潤、資本觀にその鋭利な分析のメスを入れた點に求められる。而もその見解は徹底的なケインズ『一般理論』の讀破に裏付けられてゐるといふ強味をもつ。讀者は刺戟的で興味ある、そして卓越せる議論をこゝに見出すであらう。

ケインズの資本、利潤概念のもつ晦澁さは『貨幣論』出版後のハイエクとの再三の論争にも拘らず明確化されず『一般理論』に持越されてきた。『一般理論』の資本の二つの概念、「資本設備」と「資本資産」の併用はわれわれを混亂に陥れる性質をもつ。三上氏が實物資本とベーパー・アセットを含む資本資産概念の導入を産業資本の貸付資本へのすり替へと解釋し、ケインズの利潤は産業資本の生産性からではなく、貸付資本供給の代價とむしろ見做さるべきである、とする主張はわれわれにとつて意義ある考へ方を含んでゐる。ケインズが資本はその存續期間を通じて原價を超へる収益をもたらすものであるとし、そのやうな超過収益の豫想を可能ならしめる唯一の理由を資本の稀少性に求めることは三上氏の解釋からすると「貸付資本の利子觀を利潤に適用したもの」(一二二頁)として説明可能になる。

以上のところを「産業資本の貨幣資本形態と貸付資本の資本循環における Q—Q」という類似現象より産業資本を貸付資本と同一視するということは、その論理的歸結として、一つには

利子を純貨幣的現象たらしめるために利子の源泉たる利潤をも生産過程より切り離し、それによつてより基礎的なものからそのことの根據づけを行い、一つには利潤を資本の稀少性に基くものとして、生産資本から切り離すことにより利潤を媒介とする利子への生産的諸條件の作用を遮断し、もつて純貨幣的といわれるケインズ利子理論に對し特有な論理的效果をもたらしただのである」(一二六頁)と著者は結んでゐる。

更にケインズの利子觀及び利子率決定の場については、有效需要の原理を中心理論とする以上、流通過程での購買力としての貨幣不足の原因を探索することが中心課題であつてその貨幣量については投資に關連するものであれ消費に關連するものであれ單なる貨幣として區分されないといふ特質や經濟主體の面からは社會的資本の形成に直接關係する企業心理ではなく、流通過程での購買主體としての消費者個人の心理的視點が利子率決定に主點を與へるといふ特性、その結果として利子率決定の場にあつては資本としての貨幣の利子率に對する影響力を排除する特殊な工夫、つまり一定期間に於ける投資・貯蓄の恒等關係、が導入され、貯蓄の中から經濟循環領域外へ漏出する遊休貨幣を信用創造により機能化し、それによつて各時點に於ける貯蓄・投資の可及的な一致のための媒介と同時に貸付資本需給の均等による現行支配的利子率の決定を主として支配する金融機關の役割が輕視されるといふ特質が著者により強調される。

これまでの批判の焦點は著者の次の巧妙な言廻しによつて要約されてゐる。

「利子の源泉たる利潤については、利潤と直接關係ある産業資本を貸付資本とすりかえることによつて産業資本を捨象し、もつて利潤を生産過程より切り離し、利子視した。利子については、利子に關係ある貸付資本をめぐつて對峙する機能資本家と銀行資本とを單なる消費者的個人に解消することによつて、利子と利潤の論理的關係も、また産業資本の擔當者たる機能資本家というがごとく、如何なる生産的要因をも利子關係より追放した。すなわち利潤については産業資本を貸付資本に、利子については貸付資本を單なる貨幣と個人にと、それぞれに必要な視點、および當事者を一オクターブずつずらすことにより、利子を純粹な貨幣現象として主張したのである。」(一三七頁)

最後に第五章ではケインズ利子理論の能動的批判が展開される。先づA・H・ハンセンやD・H・ロバートソンの批判、つまり利子率は資本の限界効率變化の直接的影響を受け、從つて生産的諸條件の利子率への作用は承認するべきであるとの批判、が取上げられる。併しこれらの批判がケインズ經濟學に於ける分析の短期性に向けられる點で、ケインズ利子理論の內在的、論理的批判の資格を否定されてしまふ。三上氏は「……ケインズ利子理論の缺陷を分析視野の短期性に求め、それを指摘しても、それは必要ではあるがケインズ理論にとつては致命的批判たりえないことが明らかにする。しからばケインズをして利子率決定に對する生産力の積極的作用を完全に遮断せしめたものは何であらうか。これこそがケインズ利子理論の特異的存

在を可能ならしめるものであり、われわれの究明すべきものである」(一五二頁)とか『……それが利子率を規定する一面をもつということであれば、資本の限界効率説との妥協はケインズ利子理論およびそれと緊密な関係にある全經濟學體系の崩壊を意味する。しかも彼の利子理論は勿論のこと、利子理論にいたる迄の理論展開過程にも資本の限界効率説と妥協あるいは容認せざるをえないがごとき點はない』(一五三頁)として更に内在的批判へと進んで行く。

三上氏は次に資本の稀少性に利子の源泉を求めるケインズの考へ方を「資本についても、相對的な『豐饒裡の貧困』というパラドックスを認めるならば、資本には稀少性がないにも拘らず——相對的に豐饒であるにも拘らず、尙利子率の存在する所以は資本の稀少性にその説明を求めえない』(一五八頁)との主張によつて否定する。併し三上氏は續いて、このことは「直ちにケインズ利子の特色たる利子の生産支配という機能を否定する理由にはならない。ケインズは利子の源泉が生産過程よりではなくて資本の稀少性に求めたことに誤謬を犯したとはいへ、利潤を利子の源泉とすることを否定してはいないからである」(一五八—九頁)として、批判の視點を最後のものに絞つて行く。

ケインズ利子理論の特性、特にその利子の一方的生産支配、は「彼が單に理論的便宜にもつて資本設備、技術等を所與とするという條件を設けたことに起因するのではなくて、彼の理論體系の基礎範疇たる非自發的失業そのものに起因する當然

の結果たることが明らかになる」(一六五頁)とし、又ケインズ革命と呼ばれる理由がケインズの非自發的失業概念の發見にあるとすると、「その始原の失業概念が生産過程的原因を無視した、全く流通過程における有效需要の不足のみから導き出され、生産力の變化には完全に手も觸れずに無視した特殊なカテゴリーであるとすれば、そのカテゴリーを基盤とした利子理論が、また生産力・生産的諸條件から遊離した特殊な理論たるのも當然であろう」(一六六頁)として、著者は基礎範疇たるケインズの非自發的失業概念への批判こそ同時にその上部構造理論たる利子理論の運命を決するものであることを主張する。従つて有效需要、資本蓄積の停滯よりする「沈滯的非自發的失業」の特殊性を衝くことこそケインズ利子理論の内在的批判を可能とするものである。

「沈滯的非自發的失業」に對比して、著者が提出するもう一つの非自發的失業概念「發展的非自發的失業」概念、がその内在的批判の鍵となる。生産方法、生産構造の變化、いはば資本の有機的構成の變化による失業が有效需要の過不足とは獨立に發生しうるとしたら、ケインズの非自發的失業概念はその特殊性を承諾せざるを得ない。そしてその特殊性を排除するための努力、例へばケインズ理論の長期理論化の努力、がなされる時、當然ケインズ利子理論もケインズの全理論體系と共に崩壊する運命にあると著者は結論づけてゐる。

三上氏の業績は、こゝで論じてきた利子理論からも明らかであらう如く、ケインズ經濟學とマルクス經濟學の共通の討論の場を提供する貴重な研究の一つである。特に批判の作業過程に於ける基本的要素と二次的要素の分類については學ぶべき多くのものがある。又分析の深さでは貸付資金需給説から流動性選好説への獨自の接近を果してゐる業績が高く評價されるべきであらう。更に著者が打出した幾つかの大膽で刺激的な結論は、著者と立場を異にしつつ貨幣的經濟理論の完成をこころざす者にとつても、多くの示唆と問題を提供してくれるだらう。こゝでは示唆や問題について私の疑問とするところをいくつか述べ、三上氏の御教示を得たいと思つてゐる。

一、三上氏はマルクス經濟學的立場を代表するものとして、貸付資金需給利子理論を自己の立場とされたものと考へるが、貸付資金説のもう一つの支柱である節約性向の變化の利子率への影響については觸れられなかつたやうに思ふ。この影響は三上氏の立場からはどのやうに處理されるのであらうか。資本の有機的構成の變化に對しては資本の限界効率と違つて節約性向はうまく結びつかないのではないだらうか。

二、ケインズが貸付資本の視點より利潤論を展開したといふ主張は三上氏の一つの重要な論點をなしてゐることば前述の如くである。そこでケインズの貸付資本とは一體明確には何をさすのであらうか。三上氏はケインズ利子理論の批判に當つては非常に精密な文獻参照の勞をとつてゐる。併しこゝでの貸付資本については當然自明のこととしてそれが使用されてゐる。

「産業資本家の資本前貸・投資と銀行の貸出、産業資本家の手許への資本の回流と銀行への貸出金の回流とが混同されてゐる」(一二二頁)とか「ケインズが産業資本を産業資本から相對的に獨立している貸付資本の循環の」と同一視したといふことは、貨幣の流れを貸付資本の立場から、いわば金融機關の窓口から眺めてゐるということを示すものである」(一二六頁)といふ貸付資本の使用からして、それは銀行貸出金を意味するやうに理解される。

このやうな貸付資本は「資本の限界効率表は貸付資金が新投資の目的のために需要される場合に基礎となる條件を支配するのであり、他方利子率は資金が經常的に供給される場合に基礎となる條件を支配する」(『一般理論』邦譯一九七頁)とケインズが論ずる場合の貸付資金と同一視されるであらうか。私は兩者は同一視するべきでないと思へる。ケインズの貸付資金について著者が他の概念について行つた文獻参照の勞を惜まれたことを私は残念に思ふ。

三、第二の疑點はケインズ理論體系に於ける金融機關の位置についての三上氏の解釋についての第三の疑問と関連する。「利子に對する正しき視點はケインズのいうごとく個人の視點であつてはならない。なぜなら利子率は企業としての金融機關、とくに銀行が貨幣を手離す場合に受取るものであつて、いわば一方における銀行資本、他方における産業資本という二つの資本による貸付資本としての貨幣の需要供給によつて決定されるものであるからである。個人が利子をとつて直接に貨幣を

貸付け、他の事業に融資することもあるが、それはあくまで例外である(一二九頁)とか「かゝる銀行資本と産業資本との間の取引によつて決定する利子率が、現行の支配的一般的なものとして金融市場に存在する以上、個人の投機的動機に基く流動性選好は、一般的利子率の決定には參與するものではない」(一三一頁)と論ずる三上氏の所説では、ケインズ利子理論に於ける金融機關の役割が個人の心理的傾向の役割に較べて比重の軽いものとされてゐるやうである。

もしさうだとすると、果して三上氏は流動性選好利子論での金融機關の役割を正當に評價してゐるであらうか。第一にケインズにあつては金融機關は中央銀行等によつて代表される貨幣當局から分離して、個人——勿論の中には企業も含めて——の經濟グループと併立する經濟グループを形成しない。従つてそのやうに解された金融機關の存在は「貯蓄と投資とを可及的に一致せしめる作用を果す」(一三二頁)といふよりは、單に中央銀行との關連で貨幣供給者の役割を果すものでしかない。特に三上氏のいふ如く、現金準備比率の役割を金融機關に對して認める以上は、けれどもこのことは金融機關が利子率決定に於て非常に重要な役割を果すことを否定することにはならない。又金融機關を中央銀行と共に、貨幣當局のグループに一括することは流動性選好説にとつて理論的説明の便宜以上には出ないであらう。何んとなれば金融機關を獨立の一グループとしてその流動性選好の利子率への影響を追求する研究はなされてゐるからである。第二に銀行貸出金とケインズでの貸付資金とはこ

の點で區分さるべきではないだらうか。ケインズの貨幣の供給はすべて貨幣當局の經濟活動にかゝるといふ意味で銀行貸出金に該當すべきものであり、他方ケインズの貸付資金は不活動殘高より活動殘高へ、つまり金融的流通から産業的流通へ、移行可能な資金と解さるべきであらう。もしこのやうな解釋が正當であるとすると、三上氏のケインズ理論體系での金融機關の位置づけには、更に明確化さるべき要素が残つてゐるとの私の主張は不合理ではないといへよう。

いま、いくつかの點について、著者への忌憚なき疑問を提出した。それが私の誤解によるものでなければと思つてゐる。そして論旨一貫せる著者への批判はその上部構造よりは、その諸前提の一般性の檢討に向けらるべきであらう。併しそのやうな檢討を貨幣的經濟理論建設の將來に於ける共通の課題として残したい。

(1) 則武氏の利子論についての批判點は私の批判と共通面をもつてゐると思ふ。則武保夫氏、書評、國民經濟雜誌、昭和三二年一月號、七八—九頁。

(2) 伊東氏は三上氏の指向を「マルクス理論による貨幣的經濟理論を建設せよ」ということにほかならないように思われる」と結論してゐる。伊東政吉氏「貨幣的經濟理論の性格」經濟研究、一九五七年四月號、一九四頁。

(茨城大學助教)